

『身近な仏教用語』に学ぶ真宗入門

二〇二一年〇三月二〇日（土）

一頁

第十一回 「迷惑をかけずに生きる？」

万行寺住職・東京仏教学院講師・NGOアーユス理事 本多静芳
【普請】ということ

三帰依文 さんきえもん

（独唱）にんじん 人身受け難し、今己に受く。すで 仏法聞き難し、今己に聞く。この身今生に向かつて度せずんば、さらにいづれの生に向かつてかこの身を度せん。大衆諸共に至心に帰依したてまつるべし。

（同音）ぶつ 自ら仏に帰依したてまつる。まさに願わくは衆生と共に、大道を体解して無上意を發さん。
自ら法に帰依したてまつる。まさに願わくば衆生と共に、深く経蔵に入りて智慧海の如くならん。
自ら僧に帰依したてまつる。まさに願わくば衆生と共に、大衆を統理して一切無碍ならん。

（独唱）じんじん みみょう 無上深甚微妙の法は、百千万劫にも遭遇こと難し。ごう あいあう 我今見聞し受持することを得たり。願わくは如来の眞実義を解したてまつらん。

はじめに 東日本大震災から十年

『生きていくということは』 作詞：永六輔さん

生きていくということは 誰かに借りをつくること

生きていくということは その借りを返してゆくこと

誰かに借りたら誰かに返そう

誰かにそうして貰ったように 誰かにそうしてあげよう

生きていくということは 誰かと手をつなぐこと

つないだ手のぬくもりを 忘れないでいること

めぐり逢い愛しあいやがて別れの日

その時に悔まないように 今日を明日を生きよう

人は一人では生きてゆけない 誰も一人では歩いてゆけない



一、經典のことばに学ぶ 〓 関わり合っていることが存在の成立

二頁

a、諸法無我の教え

拙著『歎異抄に学ぶ大乘仏教入門』国書刊行会九九頁

「これあるによりて彼あり これ生ずるとき彼れ生ず
これなきによりて彼なし これ滅するとき彼れ滅す」『相応部經典』

諸法無我……あらゆる存在は、条件によって成立し、なお変化し続けているから、固定的な特定の実体（変化せずそれだけで成立するもの）をもつものは何一つとして存在しない。

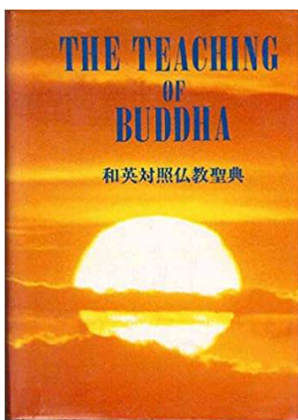
従って、誰でも、何かを「我」（我：他との関わりなく成立する）と考えてとらわれることは存在の事実にくくから、その間違った認識は自分を苦しませ（他人をも苦しませ）る。物事は思いのママにはならない。存在には独立性・孤立性はない。相互依存関係。同著一一〇頁

b、大乘經典のことば 『無量寿經』、『華嚴經』

「この世の人びとは、人情が薄く、親しみ愛することを知らない。しかも、つまらないことを争いあい、激しい悪と苦しみの中にあつて、それぞれの仕事を勤めて、ようやく、その日を過ごしている。身分の高下にかかわらず、富の多少にかかわらず、すべてみな金銭のことだけに苦しむ。なければならないで苦しみ、あればあるで苦しみ、ひたすらに欲のために心を使って、安らかなときがない。富める人は、田があれば田を憂え、家があれば家を憂え、すべて存在するものに執着して憂いを重ねる。あるいは災いに会い、困難に出会い、奪われ焼かれ無くなると、苦しみ悩んでいのちまでも失うようになる。しかも死への道はひとりで歩み、だれもつき従う者はない。

貧しいものは、常に足らないことに苦しみ、家を欲しがり、田を欲しがり、この思いに焼かれて、身心ともに疲れはててしまう。このためにいのちを全うすることができずに、途中で死ぬようなこともある。

すべての世界が敵対するかのように見え、死出の旅路は、ただひとりだけで、はるか遠くに行かなければならない」（仏教伝道協会刊『仏教聖典』一八九頁）『無量寿經』



「網の目が、互いにつながりあって網を作っているように、すべてのものは、つながりあってできている。」

一つの網の目が、それだけで網の目であると考えたならば、大きな誤りである。

網の目は、他の網の目とかかわりあって、一つの網の目といわれる。網の目は、それぞれ、ほかの網が成り立つために、役立っている。」（『仏教聖典』八一頁）『華嚴経』

「自利—自分の幸せ・利益

利他—他者の幸せ・利益

自利利他円満の歩み〓菩薩—大乘仏教の究極的な理想のあり方

二、自分を本当に知ることのむずかしさ

イ、自分を通して知るといふ学び方

仏教では、本当に教えるを知るといふことは、必ず、自分を通して知ること

ロ、深い問題意識と仏教の学びこそ、終わることのない脱皮と成長

拙著『歎異抄に学ぶ大乘仏教入門』国書刊行会 一七〇頁

江原通子^{えはらゆきこ}さん—少女時代、「あなたは誰か」と自分で問いかけ、自分で答えている。

人間の一番深いところにあるいのちのところに大乘仏教や真宗の教えを聞いていくこと

—今まで様々なものを握ったり、身にまといっている自身が改めてよく見えてくる自分の外側に仏教を意識する—同時に、自分自身を意識する。

—「あなたは誰なんだ」といふ問題意識

「仏教を知らなければ、今まで知らなかった私というものが知れてくる、教えられるということ」

仏教を知らなければ、終わることのない、自分の脱皮と成長を生み出してくれる

一、それまでの自己中心の生き方が当たり前であると思ひこみ、おかしいとも思わなかつた
自我のいのちが突き崩され、打ち壊されること
|| 南無 || 慚愧ざんき—機はかりの深信
四頁

二、それに替わり、仏に気づかされた新しいいのち、あらゆる無限のいのちとの連帯の中で生きている
いや、生かされている私であるという自覚に深められる || 阿弥陀仏—歡喜かんぎ—法の深信

最も深いいのちの体験—「さとり」、信心（二つの深い気づき、うなずき：二種深信にしゆじんしん）

「生涯にわたって、繰り返し繰り返し、自己中心の自分に気づかされます
「そして、それを通して、すべてのいのちの連帯に深く気づかされます

—気づかせる真実の道理、ことわり—關係的に他力、人格的に阿弥陀仏という—そこに往生が始まる

ハ、信心のしるし—「世をいとうしるし」『註釈版聖典』七四〇頁、「往生ねがうしるし」同七四二頁

教えを学ぶこと—深く自分を知ること—自分自身の「いのち」の迷いの姿に気づかされ脱皮し

「本来の道理になつた「いのち」に導かれ成長する

—道理に背いていた私を慚愧—脱皮

「道理に導かれた私を歡喜—成長

「信心を獲る」—「しるし」親鸞聖人

—煩惱の深い私たち—信心の「しるし」—煩惱との闘い、葛藤のあとがなにかにじみ出てくる

三、迷惑をかけずに生きる

・諸法無我—すべては他の存在との関わりで成り立つ

—自分の都合でモノゴトをとらえ、相手の立場を考慮することができない

—その迷いの見方で、相手を傷つけ、自分も振り回されている

—それ以上ものを考えなくなる甘えた自分が生まれる

高史明先生の話—拙著『改訂新版「歎異抄」を読む』角川学芸出版「私の自信とは何か」二〇七頁

「もう君は中学生だ。これからは自分のことは自分で責任をとりなさい。他人に迷惑をかけないようにしなさい」

「それができるなら、お父さんは、もうああしろこうしろと言わないことにする。自分の人生だ、自分の責任で生きてゆきなさい」

「一切干渉しない」——知識人はよかれと思って、現代的な都市型生活を作ってきた

「しかし、そこに自力の知恵の落とし穴があったのです。他人に迷惑をかけるなどといったとき、その私の意識には、その十二歳に至るまで無数の人びとの働きをいただいてきた過程が全くとっていいほど欠落していたのでした。そうであれば、他の生き物の無数のいのちをいただいてきたということは、もう完全になかったと言うほかありません。全部自己中心です」『高史明親鸞論集 第三卷「歎異抄との出会い」』法蔵館

・自害害他、自損損他——凡夫の無自覚なあり方

・信心の成立——回心^{えしん}

今までの宗教心を離れていない時——めざめの宗教の言葉は、宗教的に無自覚な立場の人にとって厳しく迷惑

——間違いないと思っていた自分の自信に光が当たり、不確かさが露わになり、自信が失われていく

——南無と思いが上がつっていた頭の下がるところに、

「今までまったく知らなかった新しい確かなものが立ち現れる——阿弥陀仏と表現される世界

「浄土真宗の教えを聞いたばかりに、それまで気にならなかったことまで気になってしまつて、とてもシンドイ。このシンドサをどう乗り越えていったらいいんでしょうか」

仏教を学んでいるつもりだが、まだ、自分の学んできた理屈や世間常識に立ったママ

——仏教では、こうした人間の知恵と同質のあり方を神とか、魔と呼び、迷いの宗教性という

親鸞の教えを連続して学んだ壮年の言葉——この段階——本人は仏教をよりどころとして学んでいるつもり



—まだ、自分の学んできた理屈や世間常識に立ったママ

南無という論理—道理に背いた自分の姿が理屈として分かってきた（けれども）

阿弥陀仏と開かれる世界—本来の道理に叶った自分が、まだ実感として肯けない

—そこに、生まれている理念的観念的な悩み

このような悩み—自分の知恵を絶対化していた迷いだったと気づき解決した時

—学者ぶった悩みだった、現実問題としての自分の問題意識が問いとなっていなかったことに気づかされる

仏教の視点—思いがった自分の抱える人間の知恵と同質のあり方—神とか魔と呼ぶ—迷いの宗教性

魔、悪魔という言葉—殆どの場合、「鬼は外、福は内」—自分の外側に悪魔

—無自覚なうちに自分は善、正義—同質

—魔を自分の心や生き方とは別のものであると思いたがる

壮年の「シンドイ」という言葉—自分が確かだと思っていたこと

—浄土真宗—考えてみたこともなかったものの見方や生き方に遭遇することがきっかけ

真実との出遇い—見えていなかったものが見え始めた—確かだと思っていた自分のものの見方や枠組み

—あやうさやもろさが知れてくること

—自分の中に今まで気づかなかったような魔とか、悪魔のようなものが見えてくる「シンドサ」

確かであると思っていた自分—そのことすら疑うことのなかった自分

—今まで一度も考えようとしていなかった常識的な発想で生きてきた自分の「確かさ」

—それが実は、見たくもなかった自分の不確かさであったという発見

・金子大栄先生（一八八一—一九七六）「念仏は自我崩壊の音である」

四、普請^{ふしん}ということ

信心の人—何を見ても金、金、金にしか見えない、聞こえない目や耳になっていないか—自問

—土産をもらっても計算し、人の新しい家を普請^{ふしん}するのを見ても聞いても金でしか計れない

人の心、おかげさまを忘れている自分を決定的に知らされた —自答

普請^{ふしん}ということ—普く、あらゆるものに、請い、たのめること—おかげを尊ぶ私に育てられたということ